

「まちづくり学習」の展開と地域との連携

—札幌市の事例分析を通して—

鈴木 貢

A Study of Development of Machizukuri Education and Collaboration with Community

— A Case Study in Sapporo City —

SUZUKI Mitsugu

Abstract: This research aims to search for the outlook and the problem of Machizukuri Education in elementary school based on the case in Sapporo City. The Machizukuri Education is study to promote independent consideration to the Machizukuri and the sense of values to judge the environment. As a result of case study, the following two has been understood. A continuous approach is necessary as the outlook of Machizukuri Education. A clear location of the Machizukuri Education in the curriculum is important as problems.

1. はじめに

まちづくり活動は、各地で多様な展開を見せている。その活動が深まりを見せる中で、「市民参加のまちづくり」から「市民主体のまちづくり」へと移行しつつある。まちづくり活動の現状は、大人主体の地域住民により展開されている。地域住民とは大人だけでなく、子どもも構成員であることは間違いない。しかし、従来のもちづくりで等閑視されてきた子どもたちは、将来は地域のまちづくりを担っていく重要なメンバーである。

また、まちづくりに対する子どもの視点は、大人とは異なる課題が発見される可能性を有している。まちづくりが市民主体へと移行段階にあるとすれば、重要な構成メンバーである子どもたちに対して、児童期からまちづくりへの関心を高める活動を工夫する必要がある。

そのような現状を踏まえて、子どもたちがまちづくりに対する関心を高める活動として、「まちづくり学習」^{注1)}に着目したい。「まちづくり学習」とは、「まちづくりへの主体的意識や環境を判断するための価値観の育成を目的とした学習」¹⁾である。「まちづくり学習」は、子どもたちが地域との絆を強め、身近な環境に対する関心を高め、発達段階の様々な過程において、継続的な活動を通してまちづくりへの参加意識の形成が期待できる。

2. 研究の目的と方法

本研究では、「まちづくり学習」に関わる様々な議論を検討し、札幌市における事例をもとに、地域との連携を図る活動の今後の展望と課題を探究することを目的とする。

研究方法は、事例として札幌市における「まちづくり学習」を取り上げ、ヒアリング調査を通して分析を行う。なお、ヒアリング調査は、札幌市立K小学校（2009. 12.21）と札幌市役所市民自治推進課（2009. 12.25）において実施した。

3. 「まちづくり学習」をめぐる様々な議論

（1）まちづくり学習と環境教育、地域学習との相違

延藤安弘は、まちづくり学習と環境教育、地域学習との相違について、次のように述べている²⁾。

①環境教育の基本的なねらいとは共通性がある。

環境教育が地球的規模、マクロなスケールの環境を総体として扱っているのに対して、まちづくり学習は、生活主体の住む地域、とりわけ身近な環境に焦点をあててるという特徴がある。

②地域学習はまちづくり学習の一つの足場となりうる。

地域学習のための教材や指導法は、小学校におけるまちづくり学習のための一定の基礎を与えており、今後のまちづくり学習のための一つの足場になりうる。

また、まちづくり学習の視点として次の四点を指摘している³⁾。

①身近な環境を種々の教材・立場で活用すること

現在の地域学習は、社会科をベースにしているが、まちづくり学習は、まちづくりの発想から、他の教科にも横断的にまたがるものである。

②問題提起型、問題発見型であること

従来の地域学習は、「情報提供型」であり、地域についての種々の情報を静的に羅列的にさづける傾向にあるが、まちづくり学習は「問題提起型」であり、身近な環境への子供たちの主体的かかわりを促すことに特徴がある。

③直接反応を高めること

子供（大人）たちが身近な環境に関心をよせるとともに、そこから新しいことがらを発見し、驚き、楽しみをみつけることを重視することである。それは、知識を間接的に吸収することではなく、環境への感受性、直接反応を高めることである。

④未来へのイメージを共有すること

まちづくり学習の第四の視点は、自分たちの町の将来のあり方についてのイメージをお互いに分けもつことである。

（2）こどもたちへのアプローチ

まちづくり研究会は『こどもとまちづくり』⁴⁾において、まちづくりに関わっている大人や役所の人たちが、もっとこどもたちに積極的にアプローチしていくことが重要であるとの見解で、次の三点を大事な点として指摘している。

①一つには、こどもたちのもっている地域の情報である。大人より、ずっと地域に密着して生活し、

地域の達人と言える子どもたちと一緒にまちづくりを考えることは重要ではないのか。

②二つめは、こどもの視点・発想である。大人より小さな体から見たまちはどうなのか。また、(中略)柔軟な頭をもつ子どもからみたまちの面白さはどうなのか。

③三つめは、まちづくりに関心・興味のある人々を増やしていくことにつながる点である。

(3) まち学習からまちづくりへ

平井なか・小澤紀美子は、まち学習としての「まち歩き」について、イギリスのまち学習の方法としての「Streetwork」を通して検討し、その課題を指摘している。その課題とは、「日本のでも『まち歩き』は活発に導入されているが、明確な目的を持たないことが多い。子ども参加のワークショップは、参加を促すためにイベント的・お祭りの要素が強い傾向がある。また、授業や、教育関係者とリンクして行われていないため、単発的なものが多く、発達段階にまで配慮した、長期的な展望の基に行われることはほとんど無いと言える。参加すること、そのきっかけづくりや楽しい体験づくり、発見に重点が置かれ、“まちを知り、愛着を育てる”といった、大きな目標はあるものの、参加意識・資質を育み、市民意識の形成のための活動にまではつながっていかないことが多い⁵⁾と述べている。

また、平井・小澤はまち学習には、「建築・まちづくりの専門家と、教育関係者のコラボレーションが行われることによって、(中略)学習内容と方法を含んだカリキュラム開発が行われることを期待したい⁶⁾との見解を述べている。

(4) 「まち学習」と「まちづくり学習」

北原啓司は「まち学習」と「まちづくり学習」の関連について、「『まち学習』と『まちづくり学習』を区別するという発想ではなく、『まちづくり』のプロセスの中に、両方がうまくつながりながら存在していると考えた方が自然です。(中略)つまり、建築関係者の考える『まちづくり学習』と、教育関係者の考える『まち学習』は、地域でつながりを持つものとして存在していかないと意味がないわけです⁷⁾と述べている。

「まち学習」と「まちづくり学習」が、地域とのつながりを持つものとして存在していかないと意味がないという指摘は重要である。

(5) 「まち学習」の現状

小松真紀・北原啓司は、学校・地域・専門家の連携による「まち学習」について検討を行った。その結果、「現実的には単発的なイベントとしての取り組みが依然として多く、教育カリキュラムを配慮した持続的、計画的な展望のもとに行われることが少ないという現状から、学校が主体となって『まち』と連携していく教育プログラムとその際の学校・地域・専門家の連携の必要性⁸⁾を明らかにした。

また、「まち学習の中で学校が地域との連携を進めていく場合、行政内での新たな連携が必要となる。それは、教育行政と都市計画行政との連携である⁹⁾と指摘した。

4. 『みんなでまちづくり』～ステキな“さっぽろっこ”になろう!! ～ (札幌市・市民自治推進課)

(1) 『みんなでまちづくり』作成の経緯

平成19年4月に「自治基本条例」が制定された。その重要なポイントは、「みんなが同じ情報を共有すること」と「まちづくりに市民が積極的に参加すること」である。その理念は、「すべての市民は、まちづくりに参加することができる」ことである。すべての市民とは、子どもから大人まで誰

でも参加できることを意味している。この条例の制定を受けて、札幌市は青少年とこどものまちづくりを全市的に展開することを企図している。その一環として、教育委員会の協力を得て、小学3年生～6年生を対象に『みんなでまちづくり』という冊子を作成した。その作成に当たっては、現場の小学校教員が主体となって編集作業が行われ、学校の教材として使うことを基本に冊子づくりが実施された。教材としてのまちづくりの分野を実践することには、得意な教員と不得手な教員が想定される。しかし、この冊子は不得手な教員でも使えるように編集されている。その冊子の特長は、参加のカテゴリーを基本に、書き込みを多くしてある。

図1 札幌市自治基本条例パンフレット¹⁰⁾



(2) 『みんなでまちづくり』の配布

『みんなでまちづくり』は、平成21年4月に市内の小学3年生全員に配布された。まず手始めとして小学3年生に配布し、6年生まで使ってもらうことを想定した。札幌市では、毎年3年生にこの冊子を配布することを考えている。4年間にわたり、授業で使うことによって、まちづくりに対する関心を高め、地域への愛着の醸成を期待できる。

図2 『みんなでまちづくり』¹¹⁾



(3) 子どもたちのまちづくりへの参加

この冊子は前述のように、授業で使うことを前提として作成されているので、小学校3年生～6年生までの教育課程の流れに沿っている。

市役所の役割は、この冊子を提供し続けることであり、校区現場で様々な使い方ができるように工夫を重ねることである。まちづくりに子どもが参加する機会を設けることは、平成20年11月に制定された「子どもの権利条例」の目的でもある。この条例では、子どもの視点に立ったまちづくりを推進し、行政や学校・施設、地域などあらゆる場面で、子どもが参加する機会を充実させることを謳っている。まちづくりに子どもが参加することは、子どもたちの親への波及効果も期待でき、市民参加のまちづくりの促進が図られることが考えられる。子どもたちがまちづくりに参加し意見を述べることは、学校の改築や児童会館の運営などにおいてすでに実施されている。

(4) 小学校と地域社会

子どもたちがまちづくりへ関心を持ち、自分たちの生活環境である地域社会を見つめ直すことは、地域に開かれた学校づくりにもつながっている。学校が地域から孤立することなく、地域住民との絆を強めることは、地域社会の一体感の醸成にも寄与できるものと考えられる。そのことは、地域社会が子どもを守るという「安全・安心のまちづくり」の形成にもつながっている。この冊子を持って、子どもたちが「まち探検」を行うことによって、地域との関わりを深め、地域住民と顔見知りになることが期待できる。そのことをきっかけとして、地域のまちづくりに子どもたちが参加する機会が増え、市民参加のまちづくりの促進に貢献できるものとする。

今後の課題は、教育委員会の協力を得て『みんなでまちづくり』の冊子を、教育課程の中に参考教材として明確に位置付けることが重要である。そのことが実現できれば、『みんなでまちづくり』はさらに使用頻度が上がることが予想できる。子どもたちは、大人より地域社会の中を歩いている。毎日働いている大人より、ずっと地域のことに関心を持っているのかもしれない。その関心を具体的に地域社会につなげる手助けが、行政の役割である。子どもの時に培ったまちづくりへの関心が、成長の過程を通して熟成していくことが、市民参加のまちづくりにとって重要である。

5. 小学校と地域との交流（札幌市立K小学校）

(1) 『みんなでまちづくり』の活用

2009年4月に『みんなでまちづくり』は、3年生に配布された。基本的には、社会科で活用することが想定されている。この冊子は、社会科の3年生から6年生の教育課程の流れに沿って編集されている。

3年生から社会科の学習として書き込み式のこの冊子を活用し、どの学校でも使える資料として配布した。社会科の教科書とリンクしていることが重要で、3年生から6年生までの継続的な学習教材として活用する。今年が初年度であるが、3年生はすでに冊子がボロボロになっている。もう少し丈夫な冊子づくりが、今後は必要である。6年生になったら、継続的な学習のまとめとして、市長へのまちづくりの提案できるような学習の積み重ねが必要である。

図3 『みんなでまちづくり』のもくじ¹²⁾

もくじ	
第1章 「地域」を知ろう!4	1-1 校区を歩いてみよう!5 1-2 地域の自然・環境を調べよう!7 1-3 地域の人にインタビューしよう!9 1-4 調べたことから、自分の考えをまとめよう!11 1-5 行ってみよう! まちづくりセンター13 1-6 利用しよう! 参加しよう! まちづくりセンター15
第2章 札幌市を知ろう!16	2-1 札幌市ってこんなまち①17 2-2 札幌市ってこんなまち②19 2-3 札幌市の好きなところを考えてみよう!21
第3章 まちづくりって どんなこと?22	3-1 札幌市をもっとよくなるためには?23 3-2 まずは知ろう! 札幌市の「今」25 3-3 みんなもできるまちづくり27 3-4 安全を守る工夫を調べてみよう!31 3-5 地域ではどんな安全への工夫をしているかな?33 3-6 まちづくりをいっしょにする仲間がたくさん!35 3-7 まちづくりの主役は市民だよ!37
第4章 みんなで考える まちづくり38	4-1 まちづくりはこうに行われるよ!39 4-2 みんなの地域ならどんな活動ができる?41 4-3 まちづくりについて考えたことを発表しよう!43 4-4 みんなでまちづくりを広げよう45 付録「まちづくり」をがんばるまちの人に賞状を贈ろう!46

- 【第1章】 3年生の第1単元→まち探検
- 【第2章】 3年生の第4単元→生活体験
- 【第3章】 4年生の第7単元→校区探検
- 【第4章】 6年生の第5単元→まちづくり

(2) K小学校と町内会の交流会 (2009.6. 30)

K小学校では、3年生が社会科の授業で『みんなでまちづくり』を活用して学習に取り組んでいる。自分たちのまちがどんなまちか再確認するために、「まち探検」を行った。「まち探検」を行ったこともたちは、学級にもどって各自が発見したことをまとめる作業を行った。こどもたちは、「まち探検」で疑問に思ったことやこんなすごい所があるなど様々なことを発見した。「まち探検」は、校区を4つに分けて1回に1ブロックずつ「まち探検」を行った。

《まち探検の日程》 ①6月2日(1回)、②6月10日(2回)、6月23日(3回)

写真1 K小学校と町内会の交流会¹³⁾



北海道新聞¹⁴⁾によれば、「札幌市中央区のK小学校3年生が、地域住民との交流会での体験を生かした社会科の授業に取り組んでいる。交流は学校、住民側の双方が求めていたもので、児童にとっては地域を実感できる授業、住民にとっては地域活動への励みになるという『実り』があったようだ。交流会は6月30日に約1時間半、同小体育館で行われた。きっかけはK連合町内会で6月上旬、防犯活動について『児童の意見を聞こう』との声が出たこと。同小に打診したところ、住民との交流を望んでいるとわかり、開催が決まった」のである。意見交流会の当日は17町内会の役員50人と3年生167人による活発な交流が行われた。

7月上旬にKまちづくりセンターで開かれた夏祭りでは、参加児童が昨年より増加した。交流会が地域活動に活気をもたらしたことが考えられる。一方、こどもたちからは、大人に自分たちの話を真剣に聞いてくれたという感想が聞かれた。また、地域の人々と顔見知りになって挨拶をするようになったり、地域の行事に参加したりと、地域との距離が縮まったように感じている。双方にとって、実りの多い交流会となった。この交流会は、『みんなでまちづくり』の第3章の「まちづくりをいっしょにする仲間がたくさん！」の取り組みであり、さらに地域との連携が深まることを期待したい。

6. まちづくり学習の展望と課題（まとめ）

「まちづくり学習」は、「まちづくりへの主体的意識や環境を判断するための価値観の育成を目的とした学習」¹⁵⁾である。子どもたちがまちづくりへの主体的な参加意識を、児童期から形成することは重要な課題である。そのためには、大人の側から子どもたちへの積極的なアプローチが必要である。その観点から、教育の果たす役割は大きなものがある。また、一方でまちづくりへの子どもの視点には、大人とは異なる新鮮な発見がある。より良い地域社会を形成していくことは、地域を構成する住民の願いである。従来のまちづくりは大人の領分と考えられてきたが、まちづくりが参加型から市民主体に移行しつつあることを踏まえれば、子どもの視点からのまちづくりへの提案は現実味を帯びてきている。

「まちづくり学習」をめぐる様々な議論からわかることは、子どもの視点・発想を尊重し、参加意識・資質を育み、長期的展望にたった市民意識の形成が重要である。「まちづくり学習」を通して、“まちを知り、愛着を育てる”子どもたちは、地域社会の担い手として成長していく可能性を有している。

札幌市の事例では、『みんなでまちづくり』という冊子の作成が、小学校における「まちづくり学習」を進展させている。2009年4月より始まった試みであるが、冊子の作成には現場の小学校教員が授業で活用することを念頭に編集にあたった。その基本線が、萌芽的ではあるが、K小学校の授業の実践により地域との交流に一定の成果をもたらした。今後の展望として、この授業実践が3年生から6年生まで積み重ね、毎年地域の活動に新たに参加する子どもたちが増えていくとすれば、その授業実践の広がりにはさらに実り豊かな成果をもたらすものと考えられる。そのためには、「まちづくり学習」を教育課程の中に明確に位置づけ、持続的な授業実践が大きな課題となる。「まちづくり学習」が、行政・学校・地域の交流・連携を通して、三者間により広範な協働関係の構築をもたらすことを期待してまとめとする。

引用文献

- 1) 安藤真理：「子供を対象とした『まちづくり学習』の展開の可能性に関する研究」、日本建築学会大会学術講演梗概集、P.693、2003
- 2) 延藤安弘：「まちづくり学習の展望」、『まちづくり研究』、Vol.23、PP.4-5、首都圏総合計画研究所、1984
- 3) 延藤安弘：「まちづくり学習の展望」、『まちづくり研究』、Vol.23、PP.5-8、首都圏総合計画研究所、1984
- 4) こどもとまちづくり研究会：『こどもとまちづくり』、P.99、風土社、1996
- 5) 平井なか、小澤紀美子：「まち学習からまちづくりへ」、日本建築学会大会学術講演梗概集、P.366、1997
- 6) 平井なか、小澤紀美子：「まち学習からまちづくりへ」、日本建築学会大会学術講演梗概集、P.366、1997
- 7) 北原啓司：『まちづくり学習』日本建築学会（編）、丸善、P.66、2004
- 8) 小松真紀、北原啓司：「学校・地域・専門家の連携による『まち学習』に関する基礎的研究」、日本建築学会大会学術講演梗概集、P.327、2000
- 9) 小松真紀、北原啓司：「学校・地域・専門家の連携による『まち学習』に関する基礎的研究」、日本建築学会大会学術講演梗概集、P.328、2000
- 10) 札幌市・市民自治推進課：札幌市自治基本条例パンフレット、2009
- 11) 札幌市・市民自治推進課：『みんなでまちづくり』、2009
- 12) 札幌市・市民自治推進課：『みんなでまちづくり』、P.3、2009
- 13) 札幌市・広報課：『広報さっぽろ（11月号）』、P.3、2009
- 14) 北海道新聞：『教える・学ぶ』、「町内会との交流生かす 札幌・K小3年社会科」、P.27、2009.7.15
- 15) 安藤真理：「子供を対象とした『まちづくり学習』の展開の可能性に関する研究」、日本建築学会大会学術講演梗概集、P.693、2003

注

- 1) 「まちづくり学習」と「まち学習」には様々な議論（第3章参照）があるが、ここでは将来のまちづくりにつながる学習という観点から、「まちづくり学習」として捉えて分析を行った。